



コロナ禍によりさまざまなサービスのオンライン化が加速したが、特に教育分野ではその恩恵が大きいように思う。感染拡大のなか、大学では講義のオンライン化が急速に進んだ。感染が制御されるようになり対面授業も復活したが、多くの大学でオンライン講義は根付いている。時間的空間的な距離を超えて学びの場にアクセスできるメリットは大きく、オンライン学習の重要度は今後さらに高まっていくであろう。

大学の学生支援にかかわっていると、従来の対面授業では問題なく学習できたにもかかわらず、オンライン授業を苦手とする学生の相談を受けることがある。初等教育から対面で学んできた多くの大学生にとって、オンライン講義は新しい体験であり、なかには適応に苦慮する者もいる。友人と一緒に空間で学ぶことがモチベーションにつながるといった声も多い。そんななかの一人が「オンライン授業を得意とする学生はずい」と語った。八つ当たりにも思えるが、自信を失い学習意欲を喪失することに比べれば、良い防衛なのかもしれない。こういった機制が働くのも、対面授業という選択肢を知っており、それに適応できるという自負があるからであろう。

一方、集団での対面授業に適応できない子どもたちがいる。成績不振となり、時には不登校となり、自己肯定感が低下する。そんな子どもたちに別の選択肢が与えられることは重要である。オンライン学習環境を含めた学びの多様化が進むことを期待している。

成人の学びの機会も多様化し、オンライン開催の学術集会も一般化した。2021年末に小規模の学術集会を主催する機会を得たが、その前年はパンデミックのために急遽オンライン開催となっていた。感染状況からやはりオンサイトでの開催は難しいと判断し、初期段階からオンライン開催として準備を進めた。会場が不要となることからコストダウンを期待したが、学術集会開催のための支援サービス

を利用すると、われわれの予算を大きく超えることがわかった。そこで調べたところ、インターネット上のサービスを組み合わせることで、サークル活動などのオンライン集会を実現している人々がいることを知り、それらを利用することにした。会員管理ができるホームページを作るサービスや、クレジットカード決済、オンデマンド動画配信など、個人事業主はもちろん大企業もが利用しているオンラインサービスを、スケールに応じた費用で利用できることを知った。セキュリティの問題やサービスを組み合わせるための専門知識が必要となるため、完全手作りとはいかなかったものの、オンサイト開催より参加費を低く設定することができた。そのおかげもあったのか前年の倍以上の方々にご参加いただくことができた。オンサイト開催であったなら、会場の混雑に慌てたかもしれない。

これを書いている時点では、第118回日本精神神経学会学術総会の開催が目前に迫っている。2021年に引き続きオンサイト開催に加えてオンラインでも視聴可能なハイブリッド方式で開催される。オンライン配信はライブに加え、会期後にオンデマンド視聴することもでき、参加の自由度は非常に高い。著者はオンサイト参加予定ではあるが、事後に学び直せる機会があることは大変ありがたい。しかし学びの機会が増える分、それに必要な時間も増える。オンライン学習の時間をどう確保するのか、今から悩ましい。

全国の委員が参加する本学会の編集委員会は、コロナ禍以前からハイブリッドで開催されていたが、パンデミックにより完全オンライン化された。移動時間を節約できるため当時からオンライン参加することが多かったが、そろそろ対面で同胞に会いたいと思う。いやそれでもやはり移動時間節約を優先してしまうかもしれない。やはり多様な選択肢が提供されることはありがたい。

平井伸英